『甲子園への遺言　伝説の打撃コーチ高畠導宏の生涯』の著者
ジャーナリスト（本学ＯＢ）　門脇護さんに聞く

高畠さんに教えられた、『本気で生きる』

高畠導宏さん。本学硬式野球部〝黄金期〟に強打者として活躍、プロ野球では落合博満やイチローを育てた伝説の天才打撃コーチだ。その高畠さんが、ＮＨＫテレビの土曜ドラマ『フルスイング』（1月19日から全6回放映）で蘇り、大きな感動を呼んだ。ドラマの原作となったのが『甲子園への遺言　伝説の打撃コーチ高畠導宏の生涯』（講談社）という評伝である。著者は門脇護さん（ペンネーム門田隆将）、本学ＯＢだ。門脇さんは、交遊のあった高畠さんから「本気で生きる」ことを教わったという。門脇さんからドラマ同様に「生きざま」の指針に富んだ話を聞いた。

学生記者　**山崎綾香**＝法学部4年

ＮＨＫテレビで放映され、多くの視聴者に感動を与えたドラマ『フルスイング』は、中央大学野球部ＯＢ、高畠導宏さん（元南海ホークス）の実話ドラマだ。

高畠さんは中大2年から大物スラッガーぶりを発揮、同期生の高橋善正投手（現、本学硬式野球部監督）らとともに黄金期を築いた。１９６７年３月本学法学部政治学科を卒業。日鉱日立を経て１９６７年秋のドラフト会議で南海ホークスに入団、その後ケガで打撃コーチとなり、ロッテ、ヤクルト、ダイエー、中日、オリックスなどで落合博満やイチロー、田口壮、小久保裕紀ら数多くの名選手を育てた。

高畠さんは還暦を前にして高校教師になることを決意し、２００３年福岡の私立筑紫台高校に着任するが、志半ばで２００４年に膵臓ガンのため60歳の若さで亡くなってしまう。ドラマは高校教師となった高畠さんが、生徒らと本気でぶつかり合い、高校野球の指導者を目指す姿を描いた。

仕事場に訪ねた原作者の門脇さんは、ジャーナリストらしく気さくに温かく、ときに高畠さんを思い出すように秘話を含めて、話をしてくださった。

◇◆◇　◇◆◇　◇◆◇

「やります」と遺体に手を合わせ誓う　半年かけ、80人以上の関係者を取材

門脇さんは、共通の知人を介して中大の先輩である高畠さんと知り合い、交遊を広げた。「タカ（高）さんはプロ野球のオモテとウラを知り尽くした人」。ジャーナリストとして、いつかそんな高畠さんについて書きたい、そう思っていた矢先のことだった。

「余命半年」。高畠さんの主治医からの告知に激しい衝撃を受けた。

あまりにも突然だった。そして「早くタカさんの話を聞かなければ……」と思った。しかし、高畠さんの病室には弟子たちを始め、見舞い客がひっきりなしに訪れる。それは、「見舞い客の嵐

門脇護さん

が去るのを待たなければならない状態」（門脇さん）だった。

平成16年6月30日。ようやく高畠さんに会いに行く約束ができた。だが、その前夜に高畠さんは突然、危篤状態になっていた。病院に駆けつけたが、もう取材は不可能だった。余命半年という診断だったにもかかわらず、告知からわずか7週間後の7月1日に高畠さんはこの世を去った。

「長患いをしていないから、筋肉が隆々としているんですよ。寝ているかのようでした。でも、名前を呼んでも答えてはくれなかった」

本人の話を聞かずに、高畠さんの話が書けるわけがない。門脇さんは、「自分のおごりだ」と感じた。ルーティーンの仕事に追われ、本来のジャーナリストとしての「まず動く」という基本をおろそかにした結果だと思った。「女房にも、『昔のお父さんと変わってきたんじゃないの？』と指摘されてしまってね」と門脇さんは振り返る。

ショックだった。「僕はそのとき、タカさんの耳元で『タカさんの人生を必ず書く』と言ってあげられなかったことが今でも悔やまれるんです」。自分の人生が本になることを高畠さんが知らないまま亡くなったことが申し訳なかった。門脇さんは、悶々とした。

高畠さんが永眠して2日後の7月3日。忘れもしない土曜の夜。門脇さんは決めた。中央大学と同じ「C」のマークがついた筑紫台高校野球部のユニホームが掛けられた高畠さんの遺体の前で手を合わせ、そして誓った。

「やります」

門脇さんはそれから猛然と取材を始めた。「会社での仕事は水曜と木曜が休み。水、木の予定は全てタカさんの関係者の取材で埋まりました」。7月から半年間、高畠さんと関わった80人以上に取材をした。「なんせ水、木しか時間がないですからね。プロ野球選手にも、日程を調節してもらった」というほどの〝過密取材〟が続いた。

「こつこつと努力する過程が『宝』」失敗したとしても何かが得られる

門脇さんは、「聞くべきときに聞かなかった」という後悔を超え、高畠さんの生きざまを書きたかった。

「タカさんは、こつこつ努力する過程を宝のように大切にする人だったんです。古き良きという

門脇　護（かどわき・まもる）さんプロフィル

1958年、高知県生まれ。本学法学部卒。「週刊新潮」編集部副部長。「週刊新潮」デスクとして、これまで政治、経済、司法、事件、歴史、スポーツなど幅広いジャンルで700本を超える特集記事を取材・執筆してきた。一方で、門田隆将（かどた・りゅうしょう）のペンネームで『裁判官が日本を滅ぼす（新潮社）』『甲子園への遺言（講談社）』等々を発表するなどジャーナリストとして活躍中。2008年3月末をもって、新潮社から独立する。

か…日本人そのものだったんですよ」

地道、そして几帳面に努力することの意味。失敗したとしても何かが得られる、という高畠さんが生涯信じてやまなかったことを現代の若者に伝えたかった。「タカさんの生きざまを知ることで、生きることの喜びや人生のすばらしさをわかってほしい」と。

「すべての若者へ」を象徴して、本のタイトルには『甲子園への』と付けた。

高畠さんはプロ野球界では伝説的な存在でも、一般的にはさほど知られていなかった。だから、何としてでも世に引き出したかった。高畠さんの評伝を門脇さんが勤める出版社からではなく他社から出版したのは、「自分の出版社からでは、十分な宣伝をしてもらえない。本屋のすみに置かれるだけで終わるのは、タカさんに申し訳ないと思った」からだった。

手にするのはイチローが使っていたバット

その結果は、テレビのドキュメンタリー番組やドラマ化へもつながった。「驚異的です」というように、15刷12万5000部（2月現在）というベストセラーになった。

プレゼントされたイチローのバット「人思い」、そして「生徒思い」

高畠さんとは家族ぐるみで交遊を深めた。門脇さんの2人の息子さんは、それぞれ小学校5年と1年生のときに高畠さんに野球を教えてもらっている。「大リーグに行くときは、おじちゃんが代理人をやるからな」。そう冗談を言いながら、高畠さんは真剣に野球を教えてくれた。

「野球が好きな人であれば、タカさんは相手を選ばないんですよ。うちの下の息子（現在、小学校6年生）は、自分がタカさんの〝最後の弟子〟だと思っています」。高畠さんが亡くなった後、高畠さんの奥さんが門脇さんの息子さんにくれたというイチローが使っていたバットを持ち出して、門脇さんは「女房も息子も、タカさんの大ファンですよ」と誇らしげに言う。

「後輩を怒ったこともない。人のいいところを伸ばし、常に励まして生きてきた。タカさんは『人思い』。教師としても『生徒思い』。生徒一人ひとりの将来の夢を聞き出し、励ました」。そうしたエピソードは、NHKテレビのドラマでも再現された。

門脇さんの著書『甲子園への遺言』が発売（平成17年6月30日）されて半年後にNHKからドラマ化の依頼があった。「のちに顔合わせで会った主演の高橋克実さんは、タカさんそのもので驚きました。それに剣道部のゴツイ男性顧問が、ドラ

マではあんなに綺麗な吹石一恵さんになっちゃうなんてね。NHK、恐るべしですよ」と笑う。ドラマの反響は大きく、『甲子園への遺言』の売れ行きもグーンと増した。

仕事場には著書『甲子園への遺言』と、ドラマ『フルスイング』のポスターが

このドラマの前に、フジテレビの『ザ・ノンフィクション』でもドキュメンタリーとして取り上げられた。こちらには本物の高畠さんの映像や筑紫台高校の生徒が登場する。「氣力」を教えられた高畠さんを思い起こし、涙する生徒の姿は、高畠さんの生きざまとダブって涙を誘う。

自ら目標を高く設定し、挑戦する好んだ言葉「覚悟に勝る決断なし」

門脇さんは中央大学の学生時代に、作家やジャーナリストを多く輩出した「グループH」というマスコミサークルで活動した。「バイタリティ溢れる集団でした」という。門脇さんも当時、自由旅行が困難だった中国へ飛び、留学生の身分を取得した上で各地をルポして歩いた。雑誌やフリーペーパーにルポを書き、そのルポが小学館の歴史本に引用されたこともある。根っからのジャーナリストである。

数多くの人たちから「タカさんからもらったもの」について取材を重ねてきた門脇さん。当の本人が高畠さんからもらったものは、「本気で生きる」ことだと言う。

「『正面突破の人生を貫け』とタカさんが言ってくれているような気がするんです」。惰性に陥り、平々凡々と流されていくのではなく、目標を高く設定して自ら挑戦していくことだ。「それから、挑戦に年齢は関係ないということを学びました」と門脇さんは言う。

高畠さんが「59歳の新人高校教師」になったように、疑問を持つことなく自分を突き進める覚悟を教わったというのだ。門脇さんも、25年間勤めた新潮社を3月末に退社し、単行本の文筆活動を中心に据えることを決断した。丸8年間にわたって明治大学で基礎マスコミ講座の講師を勤め、教え子をジャーナリズムの世界に送り込んできた実績があるため、「タカさんが〝教える〟ことの魅力に取り憑かれた理由がよくわかります。今後、私も、壁にぶち当たって、もがいている学生たちの力になってやりたい」と門脇さん。

「覚悟に勝る決断なし」。高畠さんが色紙に好んで書いた言葉だ。いつも覚悟を忘れることなく生きてきた高畠さんの生き方が、門脇さんの生き方に重なって見えた。（一部敬称を略させていただきました）